
天地

ネットワーク テーブル 438号

発行：2016・12・13：天地シニアネットワーク

T E N T I ・ T O D A Y			1
会員の広場「満蒙開拓・青少年義勇軍」「住友銀行秘史」			3
連載作品			3
随 想	天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙をはかれー 15. ニュートン - 万有引力の発見	伊那 闊歩	3
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語（13） <大原の山里1・八瀬 2・三千院>	大竹 漠洲	7
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」「すどう美術館」		10
事務局			12

T E N T I T O D A Y

大学のバスケットボールのシーズンが終わりました。一番の目標だった、関東大学秋のリーグ戦で、昇格が成らず、残念なシーズンだったのですが、伸び悩んでいた選手が、リーグ戦に入った途端に大変身、などというのを目の当たりにして、<若人のもつ可能性・特権>を改めて知ることができました。羨ましい限りですが、老いは老いなりに、可能性を追求できたら良いのですが・・・。

拓殖大学の篠塚副学長（政府系金融機関出身、論客、カラオケ友達）に誘われて、同大学の国際学部 OB が中心となった、国際フォーラム（TIF）の会員になっています。12月3日（土）に第二回公開シンポジウムがありましたので、出席しましたが、最近の大学はどちらも設備の増設に積極的で当大学の茗荷谷・本校舎も素晴らしく環境も良いのでびっくりです。

テーマは「BRICS は輝きを取り戻せるか」、BRICS が BIC になってしまったようですが、指摘されたロシア、インドなどの問題点が注目されました。米国、EC など、不透明な先行きを考えると世界経済がどうなるか、大いに気になります。

日暮里が本店の「羽二重団子」、かつて幾人もの文豪が通った店で有名ですが、支店が JR 日暮里駅のバスターミナルの前にあります。友人（男性）と喫茶店がわりに月に 2～3 回寄り、いつも<ぜんざい>を食べるのですが、店内は、外から丸見えのせいか、二人で食べているとガラガラだった店内が一杯になることがしょっちゅうです。人間心理不思議なものですが、店員さんは福の神（？）と思い込んでいるようで、2 人を歓迎してくれます。谷中も

いいですが、日暮里も良いところです。＜ぜんざい＞美味しいですよ・・・。

我が郷土、福井県の在京食事処として南青山5丁目にある「望洋楼」を以前にご紹介しましたが、そのあと従姉より日本橋室町に福井出身の「本手打ち越前そば」のお店を紹介されました。店名は、『そば処・御清水庵・清恵』、店主の話では、15年ほど前に開店したそうです。場所は「日本橋高島屋」の方向から＜日本橋＞を渡り、右折して直ぐにあります。神田川が真下にあり、眺望は最高です。

＜そば良し＞＜酒良し＞＜眺め良し＞、日本橋三越にも近いので、ごついでがありましたらどうぞ寄ってみてください。(03-3231-1588)

会員の広場

9月に信州・阿智村の「満蒙開拓記念館」を訪問したメンバーで、12月4日(日)、同じように満蒙開拓に重要な役割を果たした「満蒙開拓・青少年義勇軍」関係の史跡のある茨城県水戸市内原を訪ねてきました。

昭和初期、疲弊しきった農業の窮状を打開するためには、海外移民に活路を見出すしか無かったようですが、北米も、南米も、限界に近く無理でした。

昭和7年に満州国が樹立し、日本人による農業工作が可能か、日本政府は7年から11年まで試験的に青年を送り込みます。いけると判断したのでしょうか、昭和12年に、青少年の満州開拓を閣議決定し、国策事業として昭和13年から「五族協和」「王道楽土」をスローガンに全国から14歳～18歳の青少年を募集し、満蒙開拓青少年義勇軍の訓練生を集めました。

内原は全国唯一の訓練所でしたが、内原が選ばれたのは、一定面積が確保できること(約40ヘクタール)、東京に近いということのほか、政府に青少年の満州開拓の必要性を進言した加藤完治と、彼の経営する農業学校が内原にあったということが決定の大きな要因になったようです。

加藤は、明治44年に東京帝大農科大学卒業し、戦時中の食料増産、特に甘藷増産で国に多大な貢献をしています、一方で青少年義勇軍・訓練所長もつとめました。

内原での訓練は、基礎3ヶ月で終了、即渡満し、満州各地に点在する訓練所でさらに3ヶ年の農業実習があり、終了後に国から10町歩の土地が与えられ、大規模農業が可能となる準備がなされました。

昭和13年から、終戦時までこの内原訓練所から86,530人の訓練生が渡満しましたが、現地で召集されたり、シベリアへ抑留されたりで、郷里に帰れなかった訓練生が、約24,000人いたそうです。

今回の訪問は、ノモンハン・メンバーの中に、内原関係にご縁のある東宮さんがいて実現したものです。「加藤寛治記念館」では、95歳になるご子息から詳しく説明を聞くことが出来ました。さらに「水戸市内原郷土史・義勇軍資料館」や訓練所跡地の史跡を数か所訪問しましたが、暗い過去ということでしょうか、各方面からの支援が十分あるようには見えませんでした。

満蒙開拓は、農業の疲弊で経済的に追い詰められた日本が、農業移民で何とか愁眉を切り開こうとした一策です。移民としては、家族全員で渡満する

満州開拓団と全国から青少年を募集した青少年義勇軍の二つが用意されましたが、農村は若手が不足で、応募が少なく人集めは簡単ではなかったようです。

興味を引いたのは、阿智村の「満蒙開拓記念館」では、＜満蒙開拓は、侵略行為＞と反省していましたが、内原の「加藤寛治記念館」、その他には侵略という言葉はありませんでした。

阿智村と内原の違い、歴史の受け止め方、考え方はいろいろありますので、不思議とは思いますが、日本人・個々人がどう考えるかということが一番大事と思われます。機会がありましたら、お出かけください。（津田）

「住友銀行秘史」（元住友銀行取締役・国重惇史・著：（株）講談社・発行）
を読んで

かつての企業社会では、関東系の会社、関西系の会社というような地域色が結構意識されました。関東系の企業へ勤務しましたので、関西系の住友銀行については、猛烈経営の高収益銀行という印象が残っています。その住友銀行について、同行の元行員が「秘話」を出したというのを新聞広告で知り、読んでみました。

内容は、平和相互銀行の合併事件とイトマン事件という住友銀行にとって最悪だったと思われる２つの事件に集中しています。この２つの事件をきっかけに都市銀行トップの高収益銀行が、闇の勢力に浸食され、振り回されていく様子が、そして一方で著者が影の主役（？）となり、銀行が闇の世界に蚕食されるのを防ぐことが出来た様子が、詳しく書かれています。

一読した感想は、磯田会長、巽頭取、西副頭取の如く、登場人物が殆ど実名のうえに、大半の方々が銀行を闇の中に追い込んだ当事者として登場するので、内部の抗争史を読むような印象を受けました。部外者には、ことに登場する方々を直接知らない人にとってはなおさらですが、やや期待外れだったのではないのでしょうか。

それにしても、大銀行の仕事ぶりは凄まじい。平和相互銀行との合併が進まないとみるや、平和相互傘下の当時有名だった「太平洋ゴルフクラブ」に会社更生法を申請させ、平和相互の評判を落とさせて、合併に持ち込むという話、イトマン問題を世間に知らせるために大蔵省、マスコミなどへ情報を流したり、架空の名前で内部告発書を作って配布したりする話、通常の金融機関ではとても考えられず、さすが住友銀行ということだったようです。銀行は救われ、体制も一新し、結果としては良かったのですが、その住友銀行がその後どうなったのか、勉強不足でほとんど知りません。

先日、企業OBが数人集まった席で、「住友銀行秘史」を話題に出しましたが、誰も関心がなく読んでいない様子。元銀行マンもいましたが、最早、他行のことなど関心が無いのは当然なのかもしれません。

（津田）

連載作品

天のわざ、地のほまれ —地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

15. ニュートン - 万有引力の発見

フランシス・ベーコン（1561-1626）、ガリレオ・ガリレイ（1564-1642）、ヨハネス・ケプラー（1571-1630）、ルネ・デカルト（1596-1650）、ブレーズ・パスカル（1623-1662）、ロバート・ボイル（1627-1691）そしてアイザック・ニュートン（1642-1727）ら現在もなお、その名をよく知られているヨーロッパの偉大な哲学者、科学者たちが活躍していた 17 世紀の地球環境は、人類の生存にとって決して快適ではなかったようである。

この時期、ガリレオによって発見されたという太陽黒点がほとんど観測されなかったのだ。太陽表面に黒点が現れない（現在、年間数万個現れる）ということは、太陽活動が衰弱していることを意味し、当然、地球上の気象にも大きな影響をおよぼした。夏に雪が降り、いたるところで干ばつによる飢饉が発生し、氷河期の再来かと思われた。この 17 世紀の太陽黒点の極端な減少期は、発見者（提唱者）エドワード・マウンダー（1851-1923、英国の天文学者）の名にちなんで**マウンダー極小期**（1645 年—1715 年頃）とよばれ、これに伴って起こった地上の異常な寒冷期を**マウンダー小氷期**ということがある。

地球は、太陽の放つ膨大なエネルギーのほんの 22 億分の 1 をうけているだけなのである。太陽活動の極小期とはいえ、地球に照射される太陽エネルギー量が極端に減少したわけではないのであるが、現実には英国のテムズ川が冬季に凍結し、ニューヨークではハドソン川の結氷の上をスタテン島まで歩いて渡ることができたなど、現代ではあり得ないことが起きていたらしい。ガリレオの著書『天文対話』の挿絵に描かれた人物は、すべて異様に着膨れしているのを見て、寒さ厳しい時代であったと想像されるが、にもかかわらず、この時期、自然科学は衰退するどころか大いに発展したのだ。

17 世紀末から科学者は微積分法を思うが ままに 使いこなせるようになり、物理学はまさに爆発的な発展をなしとげたのである。たとえば、アルキメデス（BC287-212、浮力の発見）、ブレーズ・パスカル（1623-1662、パスカルの原理）やガリレオの弟子であったエヴァンジェリスタ・トリチェリ（1608-1647、真空の発見）などによって細々と散発的に研究されてきた水理学も、やがてスイスの物理学者（数学者）ダニエル・ベルヌーイ（1700-1782）と数学者レオンハルト・オイラー（1707-1783）などにより、微積分演算を駆使した大規模な流体力学への発展の道が開かれたのだ。ダニエルの父ヨハン・ベルヌーイ（1667-1748）とヨハンの兄ヤコブ・ベルヌーイ（1654-1705）も優れた数学者であり、とくに父ヨハンがダニエルとオイラーに微積分法をはじめとする数学の天才教育をほどこしたものである。

やはり、微分積分の演算法が発見されなければ、これほどの自然科学の発展は望めなかったであろうことは明白だ。ニュートン自身は微積分法の発案者ではあったが、その著書『プリンキピア』のなかではむしろ古典的な幾何学を多用し、微分法をあらわには使っていない。今回は、いよいよニュートンが万有引力を発見するその思考過程を可能なかぎりたどってみたい。

万有引力の法則：ふたつの物体の間には、それらの質量の積に比例し、距離の 2 乗に反比例する引力がはたらく

ふたつの物体の間には、宇宙開闢以来、どうしても分かからないが、引力がはたらいている。磁力がはたらく場合には、引力は N 極と S 極を近づけた時にのみはたらき、N 極と N 極また S 極と S 極を近づければ、お互いに反発力（斥力）がはたらく。しかしながら、電気や磁気を帯びていない中性の物体間には引力のみがはたらき、斥力が存在しないのである。なぜ引力だけがはたらくのか現在でもなお、大きな謎のままである。引力の起源についてはさておき、引力が（一種の）力であるかぎり、その数式表現が可能であるはずだ。地表近辺での重力 F は、物体の質量を m 、重力加速度を g とすれば

$$F = mg, \quad (g = 9.80665 \text{ m/s}^2)$$

と書けるのであった。落体にはつねに一定の加速度 g がかかっているのだ。リンゴはこの法則にしたがって、地上に落ちる。

一方、月も同じ地球の引力の作用をうけているはずであるが、地上に落ちてくることはない。ケプラーによれば月は地球のまわりを、楕円軌道を描きながら公転しているという。

ところで、ハンマー投げという競技があるが、これを地球と月の運動のアナロジーとして観察してみる（今は鎖の先端に鉄球がついているが、昔はハンマーに紐をつけて投げたらしい）。鉄球が月であり、人が地球である。人が鉄球を左回りに（東→北→西→南へと）ぐるぐる振り回すと、鉄球には遠心力がはたらいて、鉄球が南方を通過するとき人が手を放すと鉄球は東方にむかって飛び去る。（念のためネットの動画などで確認されたい！）つまり、鉄球は円軌道の接線方向に沿って、以後、慣性の法則にしたがってスピード V で一直線に飛び去るのだ。

ニュートンは月が飛び去らないように引き留めておく**向心力**について考えた。それは、月が円軌道（少し単純化して楕円ではなく円軌道とする）から離れていかないように、常に地球に向かってはたらく力であって、換言すれば、月には地球に向かう加速度がつねに加わっていて、月は地球に落下しつづけているのだ。一方、月には円運動による**遠心力**がはたらいているから、向心力と遠心力が釣り合って、月はリンゴのように地上には落ちてこないにちがいない。

地球のまわりの円軌道上を回る月のスピードを V とし、月－地球間の距離を r 、月の質量を m とする。月のスピードが一定であるとする、慣性の法則によって、月には加速度は加わっていないのではないかと思われる。しかし、月は円軌道上にあり速度の大きさ V はかわらないとしても、その方向は時々刻々変化している。つまり、加速度がつねに加わっているのだ。

その加速度を（物理学の伝統にしたがって） α と書くことにしよう。ニュートンは簡単な幾何学を使って、次のような比例関係

$$\alpha : v = v : r$$

を導いた。これからただちに向心力（地球の方向に向いている）の加速度は

$$\alpha = \frac{v^2}{r}$$

となることがわかる。これに月の質量 m を掛ければ、それが地球にひっぱられる力を表している。しかしながら、これで話は完結していないのだ。なぜなら、引力は、ただ2つの物体間の距離だけに依存する普遍的な作用であると考えられるから、速度 v が数式の中にはいないのは不適當である。しかしこの数式表現に誤りはない。そこで、スピード v を月の公転周期 T を使って書き直してみる。円周（ $2\pi r$ ）を周期でわったものがスピードであるから

$$v = \frac{2\pi r}{T}$$

と書ける。それを向心力の加速度 α の式に代入すると、

$$\alpha = \frac{4\pi^2 r}{T^2} \quad (1)$$

となってスピード v は表式から消えた。そのかわり周期 T が残っている。これでは、式を変形した意味がない。

ニュートンはここで、ケプラーの第3法則（第10回を参照）に注目した。つまりケプラーの法則が成り立つような引力の数式表現を求めたのである。ケプラーの第3法則は、公転周期 T の2乗は距離 r の3乗に比例する：

$$T^2 \propto r^3$$

と表現できる。比例定数を $(4\pi^2/K)$ として

$$T^2 = \frac{4\pi^2}{K} r^3$$

と書き、これを（1）に代入すれば、

$$\alpha = \frac{K}{r^2}$$

と書けることがわかる。向心力の加速度 α の式をすっきりさせるために上記比例式の比例定数をすこし複雑なかたちにした。単位のとりにかたによって定数 K の値はきまってくる。

これに月の質量を掛ければ月が地球から受ける引力になる。引力を F と書けば

$$F = m\alpha = \frac{mK}{r^2}$$

となる。 K は（ r や v には依存しない）定数であるが、もし地球のかわりに巨大な質量をもつ天体が月をひっぱっているなら、 K も天体の質量に比例しておおきな数値になるはずである。つまり、地球の質量を M とすると、あたらしく定数 G を持ってきて $K=GM$ と書ける。こうして書き直していくと、

最後に

$$F = G \frac{mM}{r^2} \quad (2)$$

となって、これが 2 つの物体（質量それぞれ m 、 M ）間にはたらく万有引力 F の数式表現なのである。ここで、 r は 2 物体間の距離、 G は万有引力定数と呼ばれる（物体の種類や性質には依存しない）普遍定数である。万有引力定数 G の値がわかればこの数式（2）から月、地球、太陽のほか太陽系のすべての惑星の質量を計算することができる（その計算は次回に）。

以上の定式化の過程で、必要な説明をいくつか省いた。じつは、太陽や地球、月などを質量はあるが体積のないただの点（これを質点という）として計算をすすめた。しかし、このような単純化が許されることはすでにニュートンによって証明済みなのである。また、月の軌道を円としたが、楕円でも同じことがいえるだろうか。ニュートンは、得意の幾何学的手法によって、楕円軌道の場合を綿密に検討し、万有引力が距離の逆 2 乗に比例するならば、月の軌道は楕円になり、しかも地球は楕円の 2 つの焦点のうちのひとつの位置にあること（ケプラーの第 1 法則）を証明したのだ。ニュートンはケプラーの第 2 法則（面積速度の法則）についても同じく幾何学的手法によって完璧な証明を与えたのである。

また、地球を空間に固定して計算したが、実際は月と地球はお互いの重心のまわりを回っているのであるから、この計算で良いのか、という疑問が生ずるが、それについても OK なのだ。力はその大きさと向きを持っている。力の方向は、言うまでもなく月と地球をむすぶ直線の方で、その大きさを表す数式が（2）なのである。

他にも検討すべきことがいくらか残されているが、あまり細かいことは気にせず、ここでは万有引力の式（2）が導かれたことに満足するとしたい。ケプラーの 3 法則が重要な役割を果たしたのであるが、逆に万有引力（2）がわかってしまえば、ケプラーの法則は簡単に導きだせる、換言すれば、ケプラーの 3 法則は万有引力の法則（2）の帰結なのである。

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（13）

大竹 漢州

若狭街道の古刹

大原の山里 1・八瀬

大原は高野川に沿った若狭街道にある山里です。若狭街道を北に進むと高野川の流れは遠ざかり、代わりに比叡山が迫ってきます。大原の里は比叡山の麓にある小さな盆地です。高野川は出町柳で鴨川と合流して賀茂川と名を変える川です。大原の里には市営バスで直接若狭街道を上るか、出町柳駅から叡山電鉄叡山本線を八瀬比叡山口駅で下車して、バスに乗り換えて行くかの選択がありますが、この地域の交通手段は旅人の学生時代から全く変わっていません。然し旅人も齢を重ねて、病に冒されて体力が効かなくなりました。最近タクシーを利用した旅が多くなりました。京都から隔離された位

置にあることが幸いして、若狭街道沿いの八瀬も大原も自然が豊かで、今も歴史の息遣いを感じさせてくれる地域です。

余談です。八瀬には古代人の末裔が住み着いています。洛中人とは異なる民族です。あの昭和天皇の葬儀を担った人びとは、宮内庁の公務員では無く、暗闇の世界に生きてきた八瀬の人びとでした。

八瀬は古代歴史の生きている地です。八瀬は「矢背」から転じた地名と伝えられています。「矢背」とは字の如く背中に矢が刺さった状態です。背中に矢が刺さった人物は大海人皇子（天武天皇）でした。天智天皇の死後、近江を主戦場として起こった壬申の乱で、先ず皇弟大海人皇子軍が比叡の峰々を越えて八瀬に入り、皇弟を追った天智天皇の長子大友皇子（弘文天皇）軍が乱入、大海人皇子軍と激戦が起こり、大友軍の兵士の放った矢が、大海人皇子の背に刺さり傷を癒した地が八瀬であり、治療には八瀬名物となった「竈風呂（かまぶろ）」が用いられたとも言われています。その後に、八瀬の人びとが天武天皇に肩入れした事は言うまでもありません。壬申の乱の結末は、大海人皇子が勝利して天武天皇に即位します。八瀬の歴史には、未だ続きがあります。

余談の余談です。桓武天皇が遷都した平安京は、「天智天皇の末裔の都」でした。大海人皇子（天武天皇）の敵の都です。

壬申の乱で勝利した天武天皇が崩御後、平城京の地では、皇后鸕野讃良が玉座を奪い取り持統天皇として即位して、父親・藤原不比等と共に新たな王家を開きました。新しい王家は天智系の篡奪でした。この後、天武天皇の末裔は政変に巻き込まれ、殺されたり流されたり、悲劇的な最後を遂げています。（なお、天武天皇系は47代淳仁天皇で最後になりました）

天武天皇王家から呪われた都を嫌った藤原系の桓武天皇は、平城京を捨て平安京に遷都しました。しかし八瀬の人びとは、変わらずに天武天皇（大海人皇子）系で一貫し続けました。山深い地域の人びとは、何処か「敗れた側に味方する」性向があります。山は中心（都）に対する周辺であり、異界の地です。正に八瀬は、都人にとっては「冥界」でした。歴史的に見ると、八瀬大原の人びとは慣習的によって、御所の雑役をこなしながら、朝廷にも出仕して、「駕籠丁」として天皇に対して、維新まで奉仕した事は、八瀬大原の人びとが、京の人と区別して考えられていたに違いありません。つまり八瀬の人びとは「異能の人」であり、「鬼」とも称されていました。八瀬の地は、比叡山の結界にあり、11世紀には、延暦寺の荘園の地にもなっており、比叡山延暦寺とは強い関係にありました。八瀬の人びとは最澄に使役した「鬼」でもありました。ここの住民は「八瀬童子」とも呼ばれていました。

余談が長くなりましたが、平安京への遷都は、権力者の政争で生じた怨霊の恐怖と相次ぐ河川の氾濫にありました。決して皇族貴族だけに影響がとどまっていた訳では無く、影響は鄙びた八瀬や大原の山里にも与え続けました。

大原の山里 2・三千院

八瀬の山里も大原の山里も、平安期以降は歴史舞台の主役を譲り、ひっそりと隠れるように暮らしていききました。高野山は遡るに従って狭くなり、流れの速い溪谷に変わっても、若狭街道に付かず離れずに流れています。学生

頃の記憶が呼び起こされます。街道をゆくバスの車窓から時が置き忘れたように建つ藁葺きの民家は、皆同じようで美しかった記憶があります。

昨今、民家は皆無になり、無粋なトタン屋根に吹き替えられ、日本山里の原風景を失ってしまいました。誠に残念です。日本の美しい貴重な風景がまた一つ消えてしまった。旅人一人の感傷でしょうか？。

タクシーは、駐車場に入りました。三千院は、若狭街道の東、大原の里を望む高台にあります。門跡寺院に相応しく寺院全体に風格があります。茶店やお土産屋の並ぶ狭い路を抜けると、赤や黄に染まった紅葉樹の背後には、城郭を思わせる石垣、門跡寺院を示す五本線の白い壁、そして三千院の寺構が白壁の上に姿を見せます。一分の隙も感じさせない緊張感のある寺院の構えです。院の正門は、境内南側の朱雀門です。貴人の門であり常時閉じられています。西側に位置する御殿門が、一般の出入口です。

御殿門の石段を上れば、境内です。三千院の境内は自然の傾斜を計算して、巧みに取り込んでいます。大玄関から客殿、寝殿と続きます。境内の北側にある建物群です。最初の客殿は、桃山時代に造営されています。旧御所の旧木材を用いて建て直されています。床の間には掛物に描かれた若き伝教大師最澄の自画像の姿があります。言い忘れましたが、三千院は延暦寺の門跡寺院です。襖絵には 近世画家竹内栖鳳が墨絵で描いています。雨の煙る深山幽谷に遊ぶ心境です。客殿は幾つか異なった趣のある庭園に面しています。

東から西には幾つかの石と丸く刈り込まれた皐月で構成された「聚碧園」が、建物群東の寝殿まで広がっています。江戸時代に活躍した茶人金森宗和の作庭と伝えられています。

本堂の寝殿から庭に建つ「往生極楽院」が眺められる池水回遊式庭園が、山の斜面から湧き水を引いた池を特徴としている「有清園」です。寝殿の縁に立つと、池を満たしている清らかに澄んだ水に心が洗われるようです。作家井上靖氏が、「聚碧園」「有情園」を称して「東洋の真珠」と表現しています。

寝殿は大正時代に再建された建物で古くありません。この建物のもつ本来用途は、かつて宮中で行われていた「宮中御懺法講」を行うためでした。法講の儀式は、秘仏のごき本尊薬師瑠璃光如来像が安置されている中の間で、声明による法要が、厳かに行われてきました。今は途絶えています。日に三回、この中の間で本尊に読経するだけになっています。寝殿左右に位置して二部屋があります。西の間には、救世観音半跏像と不動明王像が安置されて歴代の住職（法親王）を祀る内仏です。両ご本尊とも秘仏とされています。

東の間に玉座が設え、襖には下村観山筆の虹が描かれて「虹の間」とも呼ばれています。寝殿の正面上には「三千院」の扁額が掲げられています。

山の中の森と川に包まれた古寺・三千院の宝玉は、本堂の「極楽往生院」です。寝殿正面の庭に建つ小さな一字です。寝殿から靴を履いて「有清園」を散策しながら、池水回遊式庭園を巡ることができます。「有清園」は杉木立の中、苔の大海原と美しい錦秋が色を添えています。「往生極楽院」は、12世紀に建立された堂宇で、三千院で最も古い建物になります。中納言高松胤平法親王の妻が、夫の死後に尼となり、夫の菩提を弔うために建てた堂宇です。単層で入母屋造りの柿葺です。堂内は、浄土の世界観が表現されています。平等院や平泉金色堂の様に、内部は一面に装飾が施されていたようです。

今日でも舟形天井に目を凝らして見ると、表面に飛天の姿と青い彩色と金箔の残片が残っています。誠に小さな堂宇に大きな阿弥陀三尊像が、肩を寄合うように窮屈そうに安置されています。ご本尊の阿弥陀仏の表清はふくよかであり、且つ神秘的印象の仏様で、何時訪れても慈悲深い眼差しで迎えてくれる親近感があります。一方脇侍の勢至菩薩と観音菩薩は感覚が異なります。体型は痩せ気味で心を閉ざしている。しかも膝を浮かして、何時でも前に動ける姿勢を保っています。独特の膝を折った座り方を仏教美術では「大和坐り」と呼ぶようです。この小さな堂宇は、大懺悔三昧を修する道場で。修行者は浄土三昧に入つて極楽往生を得ると言われています。堂を締め切つて蠟燭を点じていると、その火影の中に仏がゆらゆら揺れて見えると言うことですが、この様なお姿こそが、仏像の本来のあり方なのではないでしょうか。蠟燭の火影や満月の光の中に現れる仏の厳かな来迎のお姿こそが、人びとが、求め続けた浄土の世界では無かったのでしょうか。この堂宇に安置されている来迎の阿弥陀仏彫刻が始められた平安時代後期に、浄土思想も広まっています。

堂宇の狭い空間には、死者を迎える一瞬の緊迫した臨場感と本尊阿弥陀の威厳を内在して表面の慈悲顔とが調和した世界が創り出されています。

極楽往生院は、真っ直ぐに天に伸びた杉樹と、地を覆った緑の杉苔とが成している空間にあります。堂宇を後にして歩くと、庭のあちこちに苔生した小さなわらべ地蔵たちが、微笑み顔で見上げています。穢れを知らない無垢の赤児の姿です。悦子と微笑みを誘われて先に進みました。苔の中の道は段々と急坂に変わっていきます。「金色不動堂」が見えてきます。平成期に建てられた新しい堂宇です。秘仏金色不動がご本尊として祀られています。急な石段の上り詰めた観音堂には身の丈3mの観音立像が、池水回遊式庭園「有清園」を見下ろすように立ち、堂の周囲には、小さな観音像が数多く並んでいました。

階段と坂を下り出口に向かう途中、再びわらべ地蔵の前を通り過ぎました杉木立から籠れる陽の光が、苔の上に並ぶ地蔵たちを照らしています。思わず生き続けたことに感謝の気持を表して、手を合わせた後に三千院を後にしました。いつ訪れても清浄しさを感じる寺院です。合掌。

御殿門を左手に進み、同じ延暦寺の塔頭の一つ勝林院・宝衆院に向かいました。

文化講座・講演会・美術展

奈良興福寺文化講座 平成29年1月19日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

講演：「運慶論の問題点」

講師：東京国立博物館学芸企画部

企画課長 浅見龍介

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」

興福寺

貫首

多川俊映

会場：（学）文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名
(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線
新宿駅3分)

第78回 新三木会講演会のご案内

1. 日時・会場 2017年1月19日(木)13:00-15:00
如水会館スターホール
2. 演題・講師 『天皇の世紀を生きる』
保阪正康氏 日本近現代史研究家
3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com
Tel: 047-464-4063
フルネーム・卒年・所属 (例:一般・紹介者名)
会費:2000円 婦人1000円 学生無料
茶話会:15:15-14:20 千円(自由参加)
4. ホーム <http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>
5. 予告 ● 2/16, 第79回 古森義久氏 国際問題評論家
産経新聞ワシントン駐在編集特別委員
『新大統領下、米国の今後の方向』
● 3/16, 第80回 秦郁彦氏 現代史研究家
『昭和史の争点』(仮題)

すどう美術館

〒250-0853
神奈川県小田原市堀之内110-2 ベルデュール103
◆電話、メールは変わりありません◆
Tel 0465-36-0740 Fax 0465-36-0739
メール info@sudoh-art.com
ホームページ <http://www.sudoh-art.com>

すどう美術館 コレクション パート2

会期 12月26日(月)まで
開館時間 10:00~17:00(最終日 ~17:00) 火曜定休
入館料 500円(小学生以下無料:保護者同伴)
会場 箱根芸術空間 風伯
〒250-0311 足柄下郡箱根町湯本540-4 Tel 0460-85-7440
ホームページでもご案内を掲載しています。

事務局

<事務所までの道のり>

場所：〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号
(電話・FAX 番号：03-3837-0290)

御徒町界隈では、JR山手線・京浜東北線と昭和通りが南北に並行して走っています。

- ① JR御徒町駅北口を出てすぐ右に折れて、2ブロック直進すると、昭和通りに出ます。右に多慶屋の紫色のビルを見てさらに8ブロックほど直進すると、
- ② 都営大江戸線の新御徒町駅のA2入口が右側にあります。やや進むと(都営大江戸線の新御徒町駅A2入口を出た場合は右に回ると)、佐竹商店街のアーケードがあります。右折してアーケードを7ブロックほど直進すると、佐竹商店街の出口に到達します。そこを右に曲がってしばらく行くと、左側に薄青いビルがあります。(1階は焼肉屋「もとやま」。)そのビルの2階です。

<投稿歓迎><図書の推薦依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくだされば送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますのでご了承ください。

<振込先> 振込先：三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・438号

発行：2016年12月13日

: 天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室
TEL・FAX 03-3837-0290
E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp
URL <http://www5a.biglobe.ne/~tenti/>